

意識を治療すること ——メルロ＝ポンティの制度化概念とガタリの制度分析——

廣瀬 浩司

1 「制度化」の問題系の背景

1-1 生誕百年におけるメルロ＝ポンティ

2008年はモーリス・メルロ＝ポンティの生誕百周年であり、関連して多くの国際学会が行われた。だが独特な文体の『見えるものと見えないもの』の草稿の一部を残して、彼が1961年に急逝したこともあり、死後50年近くを経ても彼の思想の位置づけは確定しておらず、新たな読解を生み出し続けている。百周年当時に行われた学会を通覧してみると、大雑把に言って議論は2つの方向に分かれる¹。一方では、彼の現象学をとりわけ認知諸科学へと応用しようとする動きがあり、ギブソンのアフォーダンス理論やオート・ポイエーシス理論などを援用した心理学やリハビリテーション理論、現象学的社会学や人類学、さらには看護学やフェミニズムなどにおいて、主に『知覚の現象学』が参照され続けている。他方の、より大陸哲学的な文脈では、ドゥルーズ、デリダ、フーコーらのいわゆるポスト・モダン思想の流行が一段落した時点において、彼らに覆い隠されていたメルロ＝ポンティの晩年の思想の独自性を再評価することで、新たな思想を切り開こうという動きがある。とりわけ議論になるのは、いわゆる「言語論的転回」から「生命論的転回」への移行である²。この視点から、彼のコレージュ・ド・フランスにおける講義の準備ノート原稿が出版され、「肉」の思想や彼の自然哲学などが厳密に検討されている。

しかし本論では、『知覚の現象学』の認知諸科学への応用でも、晩年の自然哲学の再評価でもなく、そのあいだの中期の思想の意義を考え直してみたい。というのも、前者は人間主義ないしは人間学の安易な復興に陥る危険があるし、また後者は形而上学の再興や、美学や現象学の一領域（「顕現せざるものの現象学」）に埋没してしまう可能性を孕んでいるからだ。この中期の思想は、これまではソシュールや構造主義の影響を受けた言語思想の時期と位置付けられていたが、構造論的思想も言語思想も初期から一貫したものであり、また晩年の肉の概念との対立を強調しすぎる結果にもなるので、本稿ではむしろ、彼が54年度の講義で提唱した「制度化」という概念の意義を、まずは初期の思想との関係において検討し、次にこの概念そのものの射程を（1）観念論との関係（2）他者論としての意義（3）規範と偶発性の二面性（4）想像的なものの実在性（5）新たなシステム論としての側面などについて吟味する。それを踏まえ最後に、ドゥルーズ／ガタリ（さらにはフーコー）との関係において、制度論的分析の意義を考えてみたい。ただしガタリそのものには詳しく立ち入らず、ガタリの

論文集『精神分析と横断性』にドゥルーズが付けた序文「集団についての三つの問題」を参照するにとどめる。

1-2 メルロ＝ポンティ自身による『知覚の現象学』の拡張と変容

「制度化」の概念そのものに踏み込む前に、まずはこの概念がメルロ＝ポンティの思想展開の中でどのように位置付けられるか、彼自身の説明に沿って説明しておこう。1945年の主著『知覚の現象学』から10年ほど経った54年度の講義の準備原稿³においてメルロ＝ポンティは、「生きられた身体の両義性」「知覚の優位」といった、実存主義的な初期思想のスローガンの不十分さを補填すべく、とりわけデカルト主義者フェルディナン・アルキエやカント主義者ピエール・ラシエズ＝レイらの批判を取り上げたうえで（IP, 165-166）、以下のような二つの問題をみずから提起する。

1) 非知覚的な次元への拡張

まず、『知覚の現象学』が当時の知覚心理学を現象学的な記述に活用することを当面の主題としていたため、彼のもくろみが、言語的な作用を廃し、事物との沈黙の接触を追求することにあるかのように誤解された。メルロ＝ポンティの現象学は、この接触によって身体と世界との関係を方向付けようとする目的論であり、さらには、「身体の魂」を想定し、コギトを廃棄してしまうような汎神論的思想だと理解されたのである。

だがメルロ＝ポンティの真の意図は、この「一般的な存在論」がいかに「内側から乗り越えられ」⁴、『知覚の現象学』の第三部の「コギト」の章で説明されるような、「超越論的領野」が開けるかを示すことにあった。そしてこの新たな領野においては、言語的・社会的な領野、さらには科学的知の領野などの対象的＝客観的な領野もまた、しかるべき場を持つはずである。「感覚的な領野だけではなく、イデオロギー的、想像的、神話的、実践的な諸領野を記述しなくてはならない。——すなわち、歴史的な環界（entourage）を、そしてこの環界の読解としての知覚を」（IP, 175）。知覚とは、感覚や情動にとどまらず、神話や言語から歴史的实践を含む「制度」的で超越論的な地平の読み取りとして記述されるべきなのである。

ついでに付け加えるならば、この問題提起は、政治的には、サルトルや当時のマルクス主義との論争、そして友人のレヴィ＝ストロースやジャック・ラカンをはじめとする構造主義の登場を踏まえている。すなわち、制度として沈殿した諸構造が主体の構成をどのように媒介しているのか、そしてまた、この制度的媒介を通して、主体がどのように相互主観性や歴史性へと接続するのかという問いが正面から取り上げられることになるのである⁵。後に詳しく確認するように、この問いに答えるためには、シンボリックなシステムの持つ「惰性」や「空間性」を組み入れたうえで、「制度化されたもの」へと行為によって問いかけるような、新たな歴史的「主体」の理論（「制

度化する主体」の理論)を練り上げる必要がある。要するに、言語構造をモデルとする制度において、「知覚的領野」の概念はどこまで有効なのか、あるいは制度に固有な「時間性」、さらには「歴史性」をどのように考えるかという問いが新たに提起されなければならない。

以上のような背景の下、「制度化」概念が導入される時期において、メルロ＝ポンティの「知覚」概念に興味深い拡張がほどこされる。すなわち、知覚ないしは知覚的な領野は、一方では歴史に至る「上位」の次元を基礎付ける独自の領野であり続ける。しかしながら、知覚という行為は同時に、「上位の」次元をいわば考古学的に掘り下げることによって、そこに発生する「意味」の萌芽を取り上げ直し、解釈する哲学的な行為でもある。言いかえるならば、知覚とは、一方では最も根源的な層として他の次元を基礎付けながら、同時に、こうした他の次元がすでに与えられてしまった後に到来し、それらの(経験的ならざる)発生の過程そのものを辿り直すような行為でもある。

このような(脱-ヘーゲル的な)概念の流動性は、この時期に始まるものではなく⁶、おそらく以下のような一貫した意図を持っている。すなわち(1)『知覚の現象学』で摘出したような「領野」の独自性を堅持すること。この意味では、知覚的な意味は、論理的・数学的な意味や、相互主観的・歴史の意味とは対立する。(2)しかし同時にメルロ＝ポンティは、知覚と論理、知覚と歴史などの関係付けそのものを説明不可能にしてしまうことを拒否する。論理や歴史を拒否するのではなく、それらに「相対的な権利」を与え、「しかるべき場に置く」(PP, 419)ことによってはじめて、それらの(イデオロギー的性格ではなく)「恣意性」が示されるからである。

この二つの要請を同時に満たすためには、言語や歴史の次元が、まさに知覚的次元の忘却によって成立すること、そしてこの忘却が、知覚的次元そのものにおいて根拠を持っていることを示すことが必要である。あたかも知覚的次元が、みずから自己を忘却し、言語や歴史的な領野としてみずからを完成させるかのように。というよりはむしろ、こうしたすべての次元を含んだ「世界」そのものが、みずからに対して問いかけを発し、おのずから多様な領野へと分裂しているかのように⁷。こうした「世界」のみずからへの折れ重なりを追跡し、「意味」の生成過程を確認するためには、超越論的意識のような俯瞰的な立場ではなく、いわばこの折れ重なりに身を置きながら、同時に意味を解釈するような、行為的な思考が必要である。この哲学的な行為をもメルロ＝ポンティは「知覚」と呼んでいたのだろう。こうして知覚概念は、様々な次元を横断するような流動的概念として、みずからを変容させていくのである。

こう考えるならば、五四年に「制度化」と呼ばれていたものは、知覚概念の自己変容の到達点を指し示すものとも考えられる。歴史を含む諸制度の記述を具体的に展開するために、知覚概念そのものが制度化の概念に変容しなければならなかった、とい

うこともできよう。これが本稿の基本的な仮説である。

2) 受動性の掘り下げ

メルロ＝ポンティは「制度化」概念の講義と並行して「受動性」についての講義を行い、とりわけ精神分析との関係を論じようとしていた。知覚的次元そのものがすでに「制度化」の契機、すなわち知覚の自己忘却の契機を孕んでいることを示すためには、狭義の知覚的意識の次元を越えて、意識に直接現前せず、意識によって引き受けられないようなものの現れを主題化しなければならなかった。メルロ＝ポンティが強調するところによれば、そもそも知覚的な意識なるものも、「絶対的な充実」としての事物の経験ではなく、むしろ「穴のあいた(＝へこみを持った)充実(plénitude creuse)」の経験であり、その「感覚世界の欠如、省略、ほのめかし」や「『世界』の偏差、ヴァリエント、差異」こそが、事物知覚の「地平」をなしているという(IP, 174)。このような「穴のあいた充実」のことを『見えるものと見えないもの』のメルロ＝ポンティは、「多孔性の存在」と呼ぶことになる。

フッサールが事物の地平——誰もが知っている外部地平、そして「内部地平」すなわちその表面が境界でしかないような、可視性を詰め込まれた闇——について語ったとき、この語を文字通りに受け取るべきである。地平とは、空や大地がそうである以上に、ぼやとした事物の集合体ではないし、ある類(クラス)の名称でもないし、概念化の論理的な可能性でも、「意識の潜在性」のシステムでもない。それは新たなタイプの存在、すなわち多孔性の存在、プレグナンツと一般性の存在であり、そこに開ける地平の前に立つ者が取り込まれてしまうようなものである(VI, 195)。

この「多孔性の存在」を彼は「肉」と呼びかえていくのだが、さしあたってここで注目すべきは、『知覚の現象学』が「地平」概念を「(超越論的な)領野」の概念へと練り上げていったのと同じように、『見えるものと見えないもの』は「地平」概念を「肉」という多孔性の存在へと深めていこうとしていることである。地平概念は、意識の非顕在的な様態、そして、そこにおけるさまざまなパースペクティヴの相互的な含み合い(「動機付け」の諸関係)を記述するには有益であった。だがメルロ＝ポンティがここで強調しようとしているのは、意識がこの一般性と動性(プレグナンツ)の地平に受動的に引き込まれながら、同時にある種の空虚を経験するという事態であり、その経験の記述のためには、地平概念のさらなる精緻化が必要になる。それは一方で、身体を取り囲み、それを巻き込む「肉」であると同時に、身体がそこにおいて直に経験するような「凹み」(creux)の経験の地平でもあるからだ。「多孔性」とは、相互浸透と障壁の両方、すなわち充実と欠如との双方を含むような性格を指し示して

いる。この地平概念の精緻化が新たなシステム論の練り上げに至ること、そしてガタリが「肉」と「凹み」の関係を「流れ」と「切断」という用語で分析することは後に確認する。

さて、筆者がすでに別のところで示したように⁸、メルロ＝ポンティは「受動性」についての講義において、このような意識の「盲点」のことを「側面的受動性」と呼ぶ。それは、意識そのものがその作用の過程において内的に遭遇すると同時に、意識そのものの能動的作用を裏打ちし、それを可能にし、意識の哲学によっては決して正面から主題化・対象化できないがゆえに、「側面的」と呼ばれる。

そしてメルロ＝ポンティはこの視点から、「無時間的で」「破壊不可能」だとされるフロイトの無意識概念を再検討する。彼によれば、この無意識の無時間性と破壊不可能性は、外傷的な出来事の結晶化としての「象徴的なマトリックス」（この概念については後述する）という考えに導くものである。それは現在と過去、近さと遠さの、距離を孕んだ「同時性」を実現することによって、差異化された「布置の意味」を生成させる場にほかならない。そのようにしてメルロ＝ポンティは、意識的に想起しえないような「出来事」の「多産性」を記述しようとしたのである。

この点について強調しておくべきことは、この受動性の主題が「制度化」の問題と直接に結びついていることである。側面的な受動性とは、呼び起こされたり、痕跡として残っているような記憶を越えた時点で、「根源的に制度化されてしまっているもの」の経験である。想起を含めたひとのあらゆる行為は、無から生じるものではなく、制度化されたものを何らかの仕方で延長し、反復するものになってしまう。しかしながら、プルーストが豊かに記述したように、この想起の行為が真の記憶となるとしたらそれは、けっして意識的・意志的に想起できないものを取り上げ直そうとする不可能な記憶の実現であり、過去の経験と「同じものである」と同時に「つねに別のもの」として、新たな知覚を可能にしてくれる。このような知覚こそが、「制度化する知覚」であると同時に「制度化する記憶」なのだ。私たちの「世界」は、制度化されてしまったものの痕跡と、そこにおいてつねに新たに制度化されていくものが多重決定的に交差する場として、重層化し、隆起してゆくのである。

すでに述べたように、54年度の講義においてメルロ＝ポンティは、「制度化」概念についての講義と、「受動性」についての講義を同時に行っていた。いずれの講義の場合にも、『知覚の現象学』の実存主義的あるいは人間学的な側面の、内側からの乗り越えが目指される。とはいえ、構造主義との安易な折衷がはかられているわけでもない。諸制度ないしは諸構造は、「現前しない出来事」が引き起こす「特異性の生産」（後述のガタリ）によって織りなされているからだ。おそらくこの時期のメルロ＝ポンティの思想を取り上げ直す最大の意義は、制度的な主体の理論と、根源的・自然

的な受動性の問題が、ひとつの問題の両輪として打ち出されていたことだと思われる。そしてこの二つの問題の交差点に位置するのが言うまでもなく「身体」であり、「肉」なのである。

「制度化」概念の講義の要約においてメルロ＝ポンティは、この概念が「意識の哲学の困難」に「治療薬」を与えるものだと宣言している（RC, 59）。このことはメルロ＝ポンティが「意識の哲学」に「無意識の思想」を対置しようとすることを意味するものではないし、制度論によって安易に知覚論を社会（学）化しようともくろんだものでもない。こうした要請に応えながらも、メルロ＝ポンティは、意識の哲学の利点、すなわち「意味」の解説、諸次元の建築性などをも救い出そうとしている。もちろんこのことが、たとえば精神医学の諸実践において直接の処方箋を与えることにはならないであろう。必要なことはむしろ、メルロ＝ポンティの制度化概念が切り開いた領野の実践的な側面に注目することによって、精神医学の諸概念がおのずと変容を強いられ、それが実践へと組み込まれて、その諸制度を変容させるのを期待することなのである。

2 「制度化」(institution) の概念の概要

それでは、この「制度化」という概念によってどのような分析の領野が切り開かれるのか。この概念を提唱している講義の内容を追っている余地はないので、晩年の思想や他の思想家の思想との関係を取捨しながら、とりわけその「行為」論的・実践論的側面を浮き彫りにするようなかたちで、要点を列挙する。

2-1 constitution と institution —— 対象との斜行的関係

まず指摘しておかなければならないのは、この概念が「構成」(constitution)」という概念との対照で練り上げられていることである⁹。「構成」概念は直接にはフッサールのものとして論じられているが、メルロ＝ポンティが真に標的としているのは、エルンスト・カッシーラー、レオン・ブランシュヴィックや前述のピエール・ラシエーズ＝レイを代表とする当時の新カント学派の哲学である。この学派はけっして感性的な領域をないがしろにするものではないが、最終的に「意味」を附与する審級となっているのはあくまで超越論的な主観性である。それに対してメルロ＝ポンティは、「制度化する主体 (le sujet instituant)」と「制度化されたもの (institué)」との相互関係のただなかに、相互的な基礎付け、さらには「循環」や「運動」を暴き出し、意味の自己生成の場を見出そうとする。

したがって、制度化された主体と制度化する主体があるが、それらは不可分である。構成する主体はそうではない。したがって、ある種の惰性がある——・・・

に晒されている [という事実が]。——だが [これ] こそが能動的活動を、出来事を、現在への参入を起動し、現在以後も生産的なものとなる。[中略]。主体とは、さまざまな出来事のある特定の次元が到来するようなもの、諸領野の領野である (IP, 35)。

制度化する主体は「ある種の惰性」を内在しており、それが行為においてつねに「規範」「水準」として働いている。しかしながら主体の行為は、すでに制度化された規範によって完全に決定されるものではない。たしかに「自由な」行為は、こうした規範を一種の内的な障害 (受動性) として認知するかもしれない。だがこうした障害は、同時に外部への「参入」でもある。こうした内的な障害との遭遇から出発してこそ、ひとは何かあるものに晒され、外部を見ることを学ぶのであるのだから。したがって、規範や水準は同時に、進むべき道を示し、ひとを出来事へと出会わせるようなものでもある。制度化する主体は、規範的でもあり、出来事の発生の場でもあるような領野につねに斜行的ないしは側面的に参入しているのであり、主体そのものもまた、このようにしてつねに更新されるひとつの領野として自己を設立するのである。

2-2 「斜行的コミュニケーション」と「ふと生じる意味」の結晶化

このような対象との斜行的・側面的な関係は、他者との関係においても妥当する。

[他人とは] 構成されたもの—構成するもの、すなわち私の否定ではなく、制度化されたもの—制度化するものである。すなわち、私は他人に自己を投企し、他人は私に投企するのであり、投影と体内化の関係があり、私が他人においてなすことと、他人が私においてなすことの生産性があり、側面的な引き込みによるコミュニケーションがあるのだ。これは相互主観的ないしは象徴的な領野であり、文化的諸対象の領野である。これこそが私たちの環境、蝶番、接合点である——主体と客体の交代ではなくて (IP, 37. 傍点筆者)。

制度的な領野は、自己と他者の共存の領野である。しかしながら、この共存はどこかにすでに与えられているものではなく、また統整的理念として定立されるものでもなく、そのつどその場において作り出されなければならない。またそれは、たんに平和的な合意や相互承認の地平ではなく、むしろ自己が他人に引き込まれ、他人が自己に引き込まれるような、緊張を孕んだ場であり、相互の行為の誘導、さらには潜在的な攻撃性をも含んでいる。

しかしこの相互誘導や攻撃性は、「生産性」すなわち制度的な「意味」を新たに沈殿させるものでもある。この「意味」は、まさに自他の相互関係の交差点において結

晶化する。というよりはむしろ、自他と呼ばれているものは、この意味が結晶化してはじめて、事後的に創設される。というのは、「意味」は、潜在的な暴力をはらんだコミュニケーションの過程において、自己にとっても他者にとっても予期することができなかったものとして、ふと生まれてくるからだ。そのときこそひとは、真に「何かが語られた」「何かが思考された」という経験を持つ。

マリヴォーの言葉を聞こう。「私はあなたのことをコケットと呼んだりするとは思わなかった。それは、夢にも思わないうちに、ふと言われてしまったことなのだ。」誰によって言われたのか。誰に対して言われたのか。それは精神によって、精神に対してではなく、身体と言語を備えた存在によって、身体と言語を備えた存在に対してである。そのいずれもが、あたかもマリオネットを操っている者たちのように、相手を見えない糸で引き、相手を語らせ、思考させ、そうあるべきもの、ひとりではけっしてなりえないものへと生成させる。こうして事物は、あたかも私たちが所有するのではなく、私たちが所有するようなく言葉>やく思考>によるかのようにして、ふと言われ、ふと思惑されるのだ(S, 27)。

「ふと言われ」「ふと思惑される」(se trouver dit, se trouver pensé)もの、それは二つの存在の間において、「事物の言葉」(VI, 168)として——すなわち「沈黙の声」の呼びかけとして——生まれてくるような超越的な意味である。それは、既成のコミュニケーションのシステムにおいては場を持たないような、ある種の空虚として現れるという意味では「沈黙」であるが、ひとたび語られ、思考されてしまったならば、けっして忘れられることなく、どこかに残り続けることだろう。それは「私」でも「あなた」でもない、誰の言葉でもないようなく言葉>の意味である。だからこそ、そしてその意味でのみ、それはたんなる沈黙ではなく、「事物の言葉」なのである。だがもしそれを二人がこの言葉にともに貫かれ、ともに取り上げ直すとき、それは「共通の意味」(VI, 125)として結晶化し、両者の「共存のスタイル」(IP, 121)を変容させることだろう。さらには、両者の存在そのものをも変容させることだろう。新たな語りやコミュニケーションの獲得には、つねにこのような「事物の言葉」の沈黙が介在するのである。

「制度」と呼ばれるものは、このような意味の生成の場であり、「共通の意味」の沈殿の場であり、そしてコミュニケーションのシステムとその変容の場である。「語ること」や「思考すること」は、概念や意識としてではなく、協働的な(ガタリ的な用語で言えば「集団的」な)発話行為のスタイルとして記述されなければならない。この制度の媒介的な作用のことを、メルロ＝ポンティは「斜行的」コミュニケーション、「斜行的」意味として記述する。それは自己と他者という主体のイニシアティブに依

存して発生するものではなく、むしろ「制度の制度に対する問いかけ」として自己媒介的に生まれてくる。だからこそ自己と他者は、「自己破壊」(VI, 124)の危険を冒しながらも、それをともに取り上げ直すことで、両者のコミュニケーション的な行為のシステムを変容させるような「語る言葉 (parole parlante)」(VI, 168)すなわち「制度化する言葉 (parole instituante)」を、ふと発することになるのである。

制度化するものとされるものとの斜行的関係を、メルロ＝ポンティは現在と過去との関係などにも見出すことになるが、この点については前述の別稿で詳述した¹⁰。いずれにせよメルロ＝ポンティの課題は、自己と他者、現在と過去の斜行的コミュニケーションの場を、<出来事的な意味>の持続的な「結晶化」の場として積極的に捉え返すことである。制度とは、意識による概念的な把握を経由することなしに他者によって共有されるような意味、そして、理念的な同一性を経由することなしに、時間的な持続性を持つような意味の創設である。そして制度化する主体とは、個人でも共同体でもなく、いわば誰のものでもないような「集団的」(ガタリ)発話行為を行なうような、協働的な主体なのである。

2-3 制度の二面性と象徴的マトリックス

このように、制度化の次元とは、出来事や他者の出現そのものを可能にするような、規範や水準のシステムであり、「制度化する主体」はいわばこの出現に引き込まれ、そこに内側から立ち会うことによって、システム内の「潜在的」(正確に言えば、潜在していたと事後的にみなされるような)意味を結晶化させるような主体である。後にガタリも強調するように、このプロセスは本質的な二面性を備えている。

それは一方では、他者や過去との関係において、私たちの行為の規範を創設してくれるものであり、持続的なシステムをなす。ひとたび制度が成立してしまうと、それは自立化し、自己に先立ってあるような、規範の体系とみなされる。他方このシステムは、その起源において偶然のあるいは恣意的(ソシール)であるのみならず、新たな出来事の到来にも開かれている。そしてその出来事が制度的であるならば、自己と他者、現在と過去の境界が切り取り直され、私たちの行為そのものを変容させることができるのではないか。

したがって制度とは、持続的なシステムであると同時に、外部に対して開かれているようなもの、規範的であると同時に偶発的なものである。それはローカルな場に結びついた有限なシステムであると同時に、たえず内部と外部の境界を更新しながら動きつつあるような「作動する、戦闘的な有限性」(VI, 305)なのである。言いかえるならば、制度とはいわば、「システムのダイナミックスの実際的な枠組」(IP, 43)をなすもの、すなわち、特異な出来事を内在化させつつ、それを超越的な意味として結晶化させることによって、この枠組そのものを絶えず更新していく。

狭義の知覚にふさわしい「地平」や「領野」の概念に変えて、この領野の意味がより無意識的な次元で沈殿してできる、このような「枠組」のことをメルロ＝ポンティは「象徴的なマトリックス」と呼ぶ。「無意識とは、出来事によって残される象徴的なマトリックスである」(IP, 223, cf. 213, 221)。出来事を制度的な意味へともたらずもの、それが象徴的なマトリックスとしての無意識なのである。

しかしながらこの無意識は、外的な規範や掟によって、主体を律するものではない。主体は象徴的な「掟」に分割された主体ではないのだ。制度化とは、外的な法や秩序原理に依拠することなく、内的な規範をそのつど創設することである。主体は、制度によって行為を決定されつくすこともなければ、純粹に自発的な選択を行うこともできない。制度とは、主体のこのような特異な行為の場であり、より正確に言えば、制度化というプロセスを通して主体化するものである。そして、そこに生じる意味を解読し、それをほとんど見えるようにするのは、制度に働きかける、ある種の行為的な主体なのである。

2-4 他者や過去との「鏡像的」な応答関係とシステムの「実在性」

したがって残された困難は、どのようにしたらこの内的な規範が真に「規範」の名に値するようなものとなりうるのかということになるだろう。こうした視点から制度化のいくつかの特性を整理しておこう。

1) 反転可能性と二重の襞

制度化する主体は、外から規範を持ち込んで制度を否定する主体ではないから、制度への行為的な働きかけを、あくまで内側から行わなければならない。それは制度を否定することでも乗り越えることでもなく、いわば制度がみずからに折れ曲がり、主体がそこにみずからを折り重ねる場であるような、二重の「襞」(VI, 317)への問いかけである。制度化する主体は、サルトル的な「無」ではなく、この襞にいわば織り込まれている主体である。そしてこの主体の二重の書き込みが制度化される場こそが、「肉」と呼ばれる。

このような多産的な否定こそが、肉によって、その裂開によって制度化される。否定的なもの、無、それは二重化されたもの、身体の二つの胚葉 (feuillet) であり、相互に接合する外部と内部である。(VI, 316)

身体の肉において制度化されるもの、それが襞であり、この襞こそが能動と受動、主体と客体の、手袋を裏返すような「反転可能性」を創設する。強く言うならば、反転可能な無 (cf. VI, 317) を制度の内部に書き込むことによって内部と外部に新たな連結を創設すること、そこにこそ主体が「制度化する主体」となるための場があるの

である。

2) ナルシズムの内的複数化とメタモルフォーズの場としてのキアスム

だからメルロ＝ポンティは、他者の場合についても、たとえばサルトル的な「無化」に頼ることもなければ、ラカンの外部のまなざしや、レヴィナス的な大文字の他者を持ち出すこともない。メルロ＝ポンティにとって、制度化の相関物である他者や過去は、つねに鏡像的な他者や過去、いわばもうひとりの自己なのである。

このことから、『見えるものと見えないもの』における「キアスム」の思想、またそこで語られている感覚の「根源的ナルシズム」(VI, 187) などについて新たな光を当てることができるだろう。彼の晩年の思想は、自己と他者の調和的な交流や、社会制度以前の自閉的な次元を特権化するものと考えられることがある。だが反対にこのキアスムの次元、ナルシズムの次元を、自己が根源的に外部や他者に開かれている次元、自己がみずから内側から解読し、複数化する「装置」として考えることはできないだろうか。そうしてこそはじめて、ナルシズ的な主体を真に外部へと接続することができるのではないか¹¹。

特異なナルシズ的な自己と一般的制度の接続は、「自己」そのものの存在様態の変容を要求する。自己と他者や過去、そしてもうひとりの自己との関係が鏡像的であること、それはメルロ＝ポンティにとって、自己がたんに無限に増殖することを意味するのではなく、むしろ自己が変容して他者になり、そして他者が自己に体内化されて自己を操るような、内的な「メタモルフォーズ」(VI, 193) の場であり、したがっていかなる経験的な他性の現れよりも根源的な他性の場である。鏡像的な関係とは、いわばこのような他性（特異性）の制度化的な反復の場なのである。

3) 制度的な「装置」とその「實在性」

このような関係は、ひとが身体を持ってしまった瞬間に、根源的に制度化され、そしてさまざまな制度において増幅される。それが「制度」であり、「装置」だということを私たちが強調したのは、この外部性や他性が、いわゆる自然的な身体性とはどこか別のものへと開かれているからである。もちろん文化的・象徴的の制度こそが、このような外部性や他性を媒介することはたしかである。しかしこれらは同時に、身体の能動と受動の襞において直に書き込まれているものでもあり、身体と制度とは直接に連結している。この連結そのものは自然的でも文化的でもない。自然的な次元に文化的・象徴的なものを持ち込み、反対に文化的・象徴的次元に「野生の」世界を持ち込むようなもの、そのようにして、自然と文化の対立とは別の次元で、意味を増幅させ続けるもの、これを私たちは「制度的」な「装置」と呼ぶのである。

そしてこの「装置」は、観念的・理念的な統合原理ではなく、それぞれの場面における〈モノ〉と結びついた、「實在的なもの」である。メルロ＝ポンティは『見えるものと見えないもの』の「絡み合い——キアスム」の章で、自他の鏡像的關係におい

て、「自己」と「他者」という項よりも、亡霊のごとき反映のほうがより「実在的」だと述べている (VI, 183)。この実在性を保証するものが制度である。制度こそが、自己と他者、現在と過去、そして自己と自己との相互の反転可能性、さらには相互のメタモルフォーズを保証してくれるような実在的な枠組、「蝶番」である。制度こそが相互的なメタモルフォーズの生産をつねに可能にしながら、それを一定の枠組として持続化してくれる。

4) 想像的なものの実践的な骨組みとしての制度

このように考えるならば、制度とは、いわゆる想像的な次元、イマジネールなものに、内的で実践的な骨組みを与えてくれるようなものである¹²。想像的なものは、サルトルのように現実の「無化」としてあるのでもなく、また「象徴界」(ないしはその「穴」)の到来によって始めて固定されるものでもなく、みずからへの働きによってみずからを支えるような「象徴的なマトリックス」の胚胎の場である。

ついでに付け加えるならば、彼の晩年の思想にたいする誤解は、彼のもくろみをもつばら認識論的(「一般的な存在論」的)に捉えていることに由来すると思われる。たとえばラカンにとって、鏡像とはあくまで自己認知ないしは誤認の場であった。ひとはそこにおいて未来の自己像を先取りするか、あるいはそれに「罨」のように無限に籠絡されるか、どちらかなのである。このように鏡像を認知と誤認のモデルとすること、あるいは想像的なものを主体が成立したり疎外されたりする場と考えることを、ひとはやめなくてはならないのだ。

メルロ＝ポンティにとって鏡像とは、神秘的な融合でもたんに経験的な闘争でもなく、また認知でも誤認でも、同一性の確立でも虚構の罨でもない。それはむしろこうした二項を孕んだ、実践的な「問い」と「応答」の場、そこにおいて「行為のスタイル」¹³が練り上げられ、否定なしに、制度へと接続するような場として考えられなければならないだろう。制度とはいかなる意味においても「掟」ではなく、私たちに呼びかけてくるイデオロギーなどでもない。それはあくまで「象徴的マトリックス」として、つねに実在的であり、行為の規範を指し示し、同時に規範の更新を可能にもしてくれるような場なのである。

2-5 制度の四つの「次元」と脱中心化のシステム：制度の「真理」とは

このように、身体における自己と自己との鏡像的・夢幻的な関係において、内的で持続的な規範が設定され、それを制度が媒介しているとすれば、残された課題は、身体という内的複数化や自己変容の装置から出発して、それがいかに「高次の」制度において実現されていくかを追跡することである。メルロ＝ポンティは制度化についての講義では「生命と感情の制度化(動物の刷り込み、間動物性、外傷とエディプス、嫉妬と愛の等価性)」「制度化としての芸術的活動(透視画法の発明と様式の変容)」「知

の制度化（数学的な理念性と歴史性の関係）」「歴史的制度化（リュシアン・フェーブルの歴史論とレヴィ＝ストロースの構造主義的人類学）の四つの次元の制度化について説明している。いずれの次元においても、ある根源的な出来事が、ある布置を備えたシステムに受容され、そこに独自の領野をみずから切り開くことによって「象徴的マトリックス」として持続的に作用していくかが記述されている（RC, 59-65）

その記述に立ち入ることはできないが、ここで提示された四つの次元は、しだいに統合が強まっていくような、階層構造を形成することはけっしてないことは強調しておかなければならない。制度化とは、上位のシステムへの統合ではなく、むしろそうした統合に還元されないもの、それらの間に「斜行的」交通を打ち立てるようなものであるからである。

メルロ＝ポンティ自身は統合と分化のモデルに代えて、「求心的な運動と遠心的な運動がひとつの運動である」（VI, 124, cf. RC, 65. IP, 100）ようなモデルを提唱する。言いかえるならば、統合と分化、中心化と脱中心化が同時に生起するようなモデルが求められているのである。この同時生起において起きるのは、制度という枠組そのものの内的な揺らぎであり、制度の作動のモードそのものの変容であり、外部と内部の境界の内的な更新である¹⁴。すでに「襞」と呼んだものこそ、この同時生起の場であり、諸制度は脱中心化と再中心化の襞の多元性として記述されなくてはならない。

ついでに付け加えるならば、この脱中心化と再中心化、求心と遠心というモデルは、すでに強調してきた『知覚の現象学』の地平モデルの徹底化の、ひとつの到達点であると思われる。地平モデルにおいては、システムの潜在性は「真理への開け」としてしか記述しえなかった（たとえそれがつねに閉鎖の可能性を孕んでいようと）。脱中心化と再中心化の同時生起というモデルの導入によって、中心のずれの諸様態を記述する可能性が開けることになる。そしてまた、開放か閉鎖かという二者択一ではなく、あるタイプの閉鎖がどのようにシステムの内的組成や作動のモードを変容させるのか、そしてある種の開放がどのように新たな閉鎖回路を創設してしまうのか、といったことを記述することが可能になるのである。

さらに、以上のようなシステムの根源的な多元性を踏まえるならば、晩年の「キアスム」とは、自己と他者のメタモルフォーズの場や関係の逆転の場であるばかりではなく、さらには重層的なシステムへと接続させられることになるだろう。統合的であると同時に差異化的であり、共存的でもあり複数的でもあるようなシステム論を、晩年のメルロ＝ポンティは硬直した弁証法を「超弁証法」へと変容させるような可能性として打ち出していた。

弁証法とはいずれにせよ、さまざまな変容体を通過しながらも、諸関係の逆転、逆転によるそれらの連帯であり、存在はあるとか無は存在しないなどといった立

場や発話の総体ではなく、それらを複数の平面に配分し、奥行きを持った存在へと統合するものではないのか。(中略) 要するに、私たちが求めている思考とはまさに、両義的で「腹話術史的な」思考ではなく、ひとつの世界において、二重の意味(=方向)さらには多数の意味(=方向)を差異化し、統合できるような思考である(中略)。私たちが超弁証法と呼ぶものは、諸関係の複数性、そして両義性と呼ばれたものを無制限に考察するがゆえに、〔キュニコス派や形式主義とは異なり〕真理を受け入れることができるような思考である(VI, 127, 129)。

自己と他者、現在と過去との間に創設される意味は、それが創設された瞬間に、多数の次元の制度と関係し、そこにおいて散種される。この「種」はしばらくは「無意味」の地平の中に眠っているが、いつか誰かが取り上げ直すことがあるならば(そしてその人が「制度化する主体」となる)、異質な次元間に横断的な連結を呼び起こし、それらが共存可能となるような、制度の「奥行き」(=肉)を創設する。制度化される意味とは、このように本質的に多重な意味、多元的な制度において変容しながら反復され、階層構造を斜めに横切るような意味として、制度を支えていく。したがって、制度における「真理」について語るができるとするならばそれは、時空間的に限定されたある所与の制度が、多元的な諸制度にどのように開かれているのかということのみならず、同時に、この開けが、どのような新たな接合を設立し、制度の潜在性を実現するのかを確認することにおいてなのである(Cf. IP, 124)。

「肉」という概念については、「差異」「偏差」といった用語の導入にもかかわらず、メルロ＝ポンティが平和的な共存の場を最終的に確保したいと願っていたことを示すものであるかのように解釈されることがある。肉は、脱中心化の運動を絶対化しようとする立場からは、中心化の契機にすぎないと見えてしまうからである。しかしながら肉は、ドゥルーズの言葉を使うならば、むしろ「超中心化」された(hyper-centralisé)場であり(PT, VII)、脱中心化と再中心化の同時生起による新たな接続を促すことによって、脱中心化の絶対化をたえずしりぞけるような「超弁証法的な」契機なのである。

2-6 絶対的受動性との遭遇と制度化の実践

制度化概念のまとめに代えて、このような場における身体のあり方について記述した、印象的な例を挙げよう。それは死の一年前の60年に行われた講義における、クロード・シモンという友人の小説家の作品の分析である。そこでメルロ＝ポンティは、現代小説がデカルト的存在論に替わる新たな存在論を素描しているという立場から、シモンの諸作品を分析する。シモンの小説において記述されているのは、線状的な図式では捉えられないような時間性、過去と現在との交錯や、だれのものでもないような夢幻的な時間の記述であり、また自己と他者がたがいに分身となり、入れ子状に組み

合わさり、含み含まれ合うような空間の描写である。メルロ＝ポンティによればこの描写は、意味の不在をもたらすものではなく、むしろ意味の無限の増殖をもたらすものである。

この過剰な世界において、根源的な出来事とは何か、とメルロ＝ポンティは問う。それはたえず外部から不意打ちする偶然のかつ恣意的なものであると同時に、つねに（事後的に）「起こらなかったということがありえないような何か」（＝根源的に制度化されたもの）として経験されるものである。そしてこの出来事は自己の内部、身体の内面において成熟する¹⁵。たとえば恐怖におののいて「呻いていた女は、叫びが通る道でしかないかのようにだった。」ここで身体とは、外部から襲いかかる偶然性であると同時に、それが起きた瞬間には、宿命として経験されてしまうような出来事の生成装置として考えられている。「制度化」の瞬間とは、まさにこのような絶対的な受動性（これが「制度的な苦痛」を与える）と、それに（フランシス・ベーコンの絵画を連想させる）叫びとかたちで応答する身体の能動性の、究極の出会いの場である¹⁶。彼女にできることは、それを意識によって自己欺瞞的に「引き受けること」でもなければ、運命としてひたすら感受することでもなく、この出来事の特異性を維持したままで、それを身体において意味へと成熟させることでしかないだろう。制度化という実践は、究極的にはこのような絶対的な受動性と能動性の出会いにおける意味の生成を追跡しようとするものなのである。

3 「制度分析」から「スキゾ分析」へ

最後にメルロ＝ポンティ以後の世代において、「制度」という言葉を使い、メルロ＝ポンティと同様の問題に取り組んだ思想家との関係について触れておこう。ドゥルーズ（そしてガタリ）である。彼らはいずれもメルロ＝ポンティの「制度化」概念そのものについては言及しないが、二〇世紀後半のある種の理論的・実践的なコンテクストにおいて、この概念と遭遇した。

ドゥルーズにとって「制度」という言葉は初期以来重要なものであるが¹⁷、ここではとりわけ実践的なコンテクストを強調するため、精神医学における「制度分析 (analyse institutionnelle)」との関係で立場を確立する時期 (1955-70) のフェリックス・ガタリの一九七二年の論文集に寄せた、「集団についての三つの問題」という序文に沿って検討しよう。

3-1 ドゥルーズによるガタリの制度分析の意義

ドゥルーズによれば、ガタリが政治的实践と精神分析の間で見出そうとしたものは、「集団的主体性」という新たな主体性である。この主体性は「自我」や「超自我」と呼ばれるものを作り直してしまうような全体性にはけっして閉じこめられず、むしろ

「同時に複数の集団に広がり」、「分割可能で、多数化可能で、通底的 (communicant) で、そしてつねに取り消し可能な」集団である (PT, I)。

ここで生じる問題をドゥルーズは以下の三つに整理する。第一は、「実践や精神分析理論にいかん政治を導入するか」という問題。第二に、「革命的な戦闘集団」にどのように精神分析を導入するかという問題。そして第三に、政治的集団や精神医学的・精神分析的構造に影響を及ぼすような、特殊な治療集団をどのように形成するかという問題である。それぞれについて、「制度」ないしは「制度分析」がどのような位置を占めているかを検討し、ガタリという「集団的主体性」とメルロ＝ポンティの「制度化する主体」とを突き合わせるための地ならしをすることにしよう。

1) 精神分析への政治の導入

まず精神分析の理論や実践における政治の導入については、ガタリの無意識およびリビドー概念を見れば明らかである。ガタリにとって無意識とは「社会的・経済的・経済的な領野」に直接に関係するものであり、神話や家族とは無縁である。そしてリビドーとは「社会的領野に流れる、あらゆる種類の流れに備給・脱備給し」、「因果性の切断」「諸特異性の出現」「停止点や消失点 (point de fuite. 流れが漏出する出口でもある)」を持ち込むものにほかならない (PT, II)。言いかえるならば、精神分析がこれまで前提してきた、「絶対的なナルシズム」と「社会的適応」の二者択一の彼方において、「特異な社会的な布置」を見出していかなければならないのだ。メルロ＝ポンティの制度化概念もまた、「根源的ナルシズム」を相互主観性へと接続することを目ざすものであったことはすでに確認した。

さて、ガタリにおける、政治と精神分析の接合に問題を限定するならば、重要なのはライヒとの関係である。ライヒのように、リビドー的な経済が政治的な経済を主観的に延長すると考えたり、性的な抑圧が経済的搾取や政治的な従属 (assujettissement) を内面化するなどと考えるはならない。リビドーとしての欲望や性は、つねにすでに社会的領野全体に広がり、そこにあるモノやヒトや象徴の下を通る流れと一致し、それらの切断を規定し、それらを形作ってさえいとガタリは言う。

「制度分析」とはまさに「集団の客観的な諸形式における」、「流れとその切断の主体性」として定義される。「制度と制度的対象の、欲望する主体」は主体と客体、上部構造と下部構造、生産とイデオロギーといった対立の彼方において見出されなければならない (PT, IV)。

2) 集団への精神分析の導入

第二の問題は反対に、精神分析をどのようにして政治的集団へと導入するかという問題である。これはオイディプス・モデルを政治に適用するといった、たんなる「応用」ではありえない。レーニン主義に始まる「ナショナルな共産党」と「国家装置」の共犯関係をおさらいしたあとでドゥルーズは、ガタリの提唱する「従属集団 (groupes

assujettis)」と「主体集団 (groupes-sujets)」という区別を取り上げる。「主体集団」とは、「従属集団」に特徴的な全体性と階層性を払いのけるような、「発話行為の担い手」「欲望の支柱」「制度的な想像の諸要素」であり、それをガタリは「横断性」と呼ぶ (PT, VI)。横断性はまた、「非意味や死や炸裂の可能な書き込み」や「創造的な切断」の展開を担うものでもある。このような横断性の有無こそが、ある集団の評価基準となるのである。

しかしながらドゥルーズは、これらは二つの集団であるというよりは、「制度の二つの側面」を指し示すと付け加える。主体集団もその主体としてのありかたにパラノイアックに固執することもあれば、従属集団が「主体的な切断のポテンシャル」を残していることもあるからだ。だからこそガタリは、メルロ＝ポンティと同じように、「自発性主義 (spontanéisme)」(ふと語られ、ふと思考されるもの) と「中央集権主義」(象徴的マトリックス) の二者択一を退け続けてきた。問題はむしろ「横断的なやりかたで働くような統合の本性」を見きわめ、欲望に特有な多性を垂直的に押しつぶしてしまわないことである。このような統合は「分析によってなされなければならない、集団や大衆の欲望に対して、分析者の役割」を引き受けなければならない (PT, VII)。三協康生氏が言うように、「さまざまな活動そのものに『制度分析』が含まれるのであり、いわばそうした活動そのものが『制度分析』なのである」¹⁸。

だがそれはどのような分析であろうか。それは (A) 集団において、自己自身と他者について、欲望分析の諸条件を構成すること。(B) 資本主義社会において消失点を形作るような流れを追跡すること、そして社会的決定論や歴史的因果性のただ中に切断を導入すること。(C) あらたな欲望の発話を形成することができるような、集団的な発話行為の担い手を取り出すこと。(D) 前衛的な集団ではなく、社会的プロセスと接合しているような集団を構成すること。(E) そのようにして、伝統的には分離している諸秩序を横断するような主体性を見出し、政治的な経済とリビドー的な経済がひとつであるような分離点を捉えること (PT, VII)。このようにして「制度分析」ないしは「スキゾ (分裂) 分析」は、「シニフィアンの構造」や因果的な連鎖に切断を持ち込み、「来るべき現実」 (= 制度化されるべき実在性) として隠されているようなポテンシャルを解放することを目ざすのである。

3) 治療集団の形成

新たな制度的な治療集団の確立のためには、言うまでもなく「狂気」の位置づけが重要である。この位置づけに関して「スキゾ分析」はいわゆる「反精神分析」との論争によって議論を練り上げていく。

スキゾ分析は、フォーコーとともに「狂気の特異性の評価」を問題にする。通常は精神病理学の成立によって、いわゆる狂気は消滅したとされる。だが精神病から狂気を抽出すべきであって、逆ではない。だから「制度分析」は、反精神医学のように、

「薬学的な機能を拒否すること」「制度の革命的な可能性のすべてを否定すること」を目ざすものではない。究極的には反精神医学は、精神的な疎外＝狂気 (aliénation) と社会的な疎外を混同し、狂気の特異性を消し去ってしまっているのだ。制度を否定し、狂気を一般化するのではなく、むしろ「現代社会一般、社会的領野の総体をこそ、その主体的な立場における狂気の特異性との関係で解釈しなければならない」(PT, IX)。

むろんのこと、以上のようなガタリの「制度分析」は、ジャン・ウリーヤトスケイエスの「制度的 (制度における、制度に対する) 精神療法」の延長に位置付けられる。彼らにとって「制度」とは、「法」や「契約」に変わるモデルを提供するものであるからだ。「絶望的な契約の形式に陥りがちな反精神医学」と「セクター方式の精神医学」¹⁹とのあいだで、「制度的精神療法」は困難な第三の道を模索してきた。ガタリの課題はまさに、病院にはとどまらない、このような意味での制度を「真の創造の対象とすること」であり、狂気と革命はひとつのものと考えてることによって、「欲望する主体性」という特異な立場を維持することなのだ (PT, XI)。

3-2 制度分析と制度化概念

さまざまな政治的・実践的なコンテクストの違いや、それぞれのフォーメーションの差異を踏まえたうえで、メルロ＝ポンティの「制度化概念」とドゥルーズ／ガタリの「制度分析」を突き合わせることはどのような意味があるのだろうか。

(1) まずは「制度」と呼ばれる領野について。メルロ＝ポンティにとってそれは、「主体」と「客体」の相互関係ないしは交差の場であり、自他の相互誘導的・相互変容的な共存の場であった。そしてこの交差点は、個人的なものや社会的なもの、自然的なものや文化的なものとの対立とは無縁な次元で、実践的かつ重層的に設立されるような次元である。このようにメルロ＝ポンティが、現象学的な意識分析をいわば無意識的な次元に掘り下げることによって、諸次元の階層性を掘り崩し、脱中心化ないしは脱-根拠化するものを、いわば「我知らず」発見していくような方法を採用のに対して、精神分析家としてのガタリは、直接的に無意識的な次元から出発し、それを社会的・政治的な領野へと直接に接続することから始める。その結果として両者において現れてくるのが、「絶対的なナルシズム」と「社会的な適応」の間、主体と客体、上部構造と下部構造、生産とイデオロギーといったもろもろの対立を逃れ去るような「特異な社会的な布置」であり、「横断性」の次元である。

(2) だが晩年のメルロ＝ポンティやガタリもまた、このような横断的な媒介を指摘するだけでは満足せず、そこにおける「意味の増幅の装置」を創造的なものとして設立しようとする。ここで必要になってくるのが、メルロ＝ポンティにとっては「肉」の概念であり、ガタリにとっては「流れ」の概念である。それらはいずれも、既成の

諸階層を横断的に接合するものであると同時に、たんなるカオスではなく、むしろ「出来事」や「特異性」の生産の場でもあるものとして考えられることになるだろう。

したがって「肉」や「カオス」は、それ自体のうちに、否定とは異なるかたちで、それらに「襞」や「偏差」（メルロ＝ポンティ）や「切断」の契機を孕んでいる。これらこそが、特異性の生産と内的な複数化の契機なのである。こうした襞や切断においてこそ、自己と他者といった、すでに制度化された諸項の間に、「最大限の交換」（ジャン・ウリ）²⁰が行われるような条件が作り出される。そしてこの交換は、感情、もの、言語などすべての次元にまたがっている。興味深いことにメルロ＝ポンティは、このような交換の実現のことを、ガタリに比べてはるかに慎ましいやり方ではあるが、「欲望」と呼んでいる²¹。

(3) さらに両者において、制度的な次元とは、実践的であると同時に分析的な次元である。両者とも「ふと生じるもの」や「自発性」に全面的に信頼を寄せるのではなく、それを取り上げ直し、無意味を意味へともたらしような実践を、「集団的な」行為のスタイルとして記述しようとしているからだ。実践的でも分析的でもあり、活動的でも解読的でもあるような「装置」や「機械」、『行為』と『もの』の双方を含むような運動の総体²²、このようなものの設立こそが、両者が共有するモデルであると考えられる。このようなイメージは、思弁的な色彩の強いメルロ＝ポンティ思想に実践性を与えると同時に、まずは概念を制度において働かせようとするガタリの思想に、（おそらくドゥルーズとの共同作業よりも）構築的かつ説得的な性格を与えることになるだろう。

4 まとめにかえて

メルロ＝ポンティの制度化概念とガタリの制度分析の突き合わせは、相互の概念的差異を超えて、現代にも有効な実践と集団のあり方の方向を指し示している。この突き合わせにおいて重要であったのは、精神医学と精神分析の実践であった。とりわけ精神分析の実践との対決によってこそメルロ＝ポンティは、「知覚的領野」を「象徴的マトリックス」へと先鋭化し、ガタリの社会的・政治的な無意識と遭遇することができたし、ガタリのほうは、ラカン主義ないしは構造主義一般を批判的に通過し、「構造」概念に代わるものとして、流れと切断として規定される「機械」を打ち出すことができたのである。

この遭遇にさらなる厚みを与えるために有効なのは、フーコーの権力概念である。というのも、『精神医学の権力』という講義の出版によって、彼の権力概念が、主に精神医学における「反精神医学」の運動、そしてバザーリアを代表とするイタリアの「制度論」的な立場との非常に密接な突き合わせによって練り上げられてきたことが明らかになってきたからである²³。「反精神医学の核心には、制度による、制度のなかでの、

制度に対する戦いがある」²⁴。この戦い（制度の制度に対する問いかけにおける主体の行為）に「戦術」を与え、制度概念を放棄し、それを権力概念へと書き換えたフーコーの立場はどこまで妥当なのか。権力概念を制度概念との関係に突き戻すことによって、安易な拡張によって単なる批評的・時評的な道具になってしまったこの概念に、新たな力を与えることはできないであろうか。こうした問いについては、稿を改めて論じることにはしたい。

付記：本稿は第16回多文化間精神医学会（二〇〇九年三月二七日、川崎市産業振興会館）におけるワークショップ「メルロ＝ポンティ生誕100年——精神医療とメルロ＝ポンティの制度概念をめぐって」における口頭発表「メルロ＝ポンティの『制度化』概念とその射程」の発表原稿をもとに、全面的に書き換えたものである。当日お世話になった三脇康生・松嶋健・江口重幸の各先生にこの場を借りて御礼申し上げる。なお本論は、同時期のいくつかの論考を総合したものとして、それらと重複する箇所があることをお断りしておく。

参考文献

1 メルロ＝ポンティの著作

L'Institution/La passivité, Notes de cours au Collège de France (1954-1955), texte établi par Dominique Darmaillacq, Claude Lefort et Stéphanie Ménasé, Paris, Belin, 2003. (IP)

Notes de cours 1959-1961, texte établi par Stéphanie Ménasé, Paris, Gallimard, 1996. (NC)

Phénoménologie de la perception, Paris, Gallimard, 1945. (『知覚の現象学』竹内芳郎・小木貞孝・木田元・宮本忠雄訳、みすず書房、一九六七、一九七四年) (PP)

Résumés de cours (Collège de France 1952-1960), Paris, Gallimard, 1968. (『言語と自然』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、一九七九年) (RC)

Signes, Paris, Gallimard, 1960. (S)

Le visible et l'invisible, texte établi par Claude Lefort, Paris, Gallimard, 1964. (『見えるものと見えないもの』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、一九八九年) (VI)

2 その他

Félix Guattari, *Psychanalyse et transversalité (Essais d'analyse institutionnelle)*, préface de Gilles Deleuze intitulé « Trois problèmes de groupe », Paris, La Découverte, 2003 (1974). (『精神分析と横断性』、杉村昌昭、毬藻充訳、法政大学出版社) (PT)

Michel Foucault, *Le Pouvoir psychiatrique*, Paris, Gallimard/Seuil, 2003. (『精神分析の権力』慎改康之訳、筑摩書房)

注

¹ 生誕百周年に関連して行われた学会の報告および学術雑誌の特集としては、(1) *Alter, revue phénoménologique* (éd. Alter), No 16, 2008 (2) 『思想』(岩波書店)、メルロ＝ポンティ生誕100周年、2008年11月号、No. 1015 (3) 『現代思想』(青土社)、総特集メルロ＝ポンティ、2008年12月臨時増刊、vol. 56-16、などがある。

² 今日の「生命の現象学」の概要については、新田義弘『世界と生命』、青土社、2001年のとりわけ第9章を参照。

³ *L'institution/La passivité, Notes de cours au Collège de France (1954-1955)*, Paris, Belin, 2003 (以下IPと略し、頁数を記す)。他の著作の引用に際しては、末尾の略号を参照いただきたい。

⁴ 「知覚されたものの分析は、一般的な存在論において始まる(そして観念論、あるいは汎神論的ないしはアリストテレス的な合目的性へと回収される)。それは内側から乗り越えられる。だが読者はそのことに気づかない。それらは、存在には触れないような、「心理学的な詮索」や「身体表象」だというわけだ。」(IP, 174)。Cf. PP, 77.

⁵ たとえばコルネリウス・カストリアディスは七五年に出版された『社会の想像的な制度化』に収められた論考において、「疎外」とは「歴史への内属」でも「そもそも制度が存在していること」にあるのでもなく、「制度への関係の諸様態」としてみなされるべきこと、そしてこの制度との関係を媒介として、歴史との関係が明らかにされることを指摘している。Cornelius Castoriadis, *L'institution imaginaire de la société*, Paris, Seuil, 1975, p. 159.

⁶ たとえばすでに『行動の構造』において、知覚概念は以下のように理解されている。「知覚というものを、諸実在(existences)を認識せしめる行為として理解するならば、いま論じた問題のすべては知覚の問題に帰着する。この問題は、構造と意味の二重性にこそ存する」(*La structure du comportement*, Paris, PUF, 1942.

⁷ 世界のおのれ自身への問いかけへの問いかけとしての哲学については、『見えるものと見えないもの』の以下のまとめを参照。「要するに哲学は知覚的な信念に問いかける——だが通常の意味での解答を期待することも、受け取ることもない。というのはこうした問いを満足させるような変項や未知の不変項を開示することではないし、存在する世界は問いかけという状態で存在しているからだ。哲学とは、おのれ自身に問いかける知覚的な信念である。これについては、あらゆる信念と同様に、それが会議の可能性でもあるから信念と言われるということ、そして事物を際限なく踏破する私たちの生は、連続的な問いかけでもあるということが言えよう」(VI, 139-140)。Cf. aussi, S, 222.

⁸ 拙稿「野生の世界の風景と出来事の暴力」、『思想』第一〇一五号、二〇〇八年一月、岩波書店、八―二七頁。

⁹ メルロ＝ポンティがどのような文脈でこの語を選んだかははっきりせず、むしろ多方面の問題系の交差する場においてこの語が選ばれたと思われる。(1) 直接に関係するのは、フッサール『危機』書のStiftung(これはUrstiftung, Nachstiftung, Endstiftungという、呼びかけと応答の連鎖として理解される)である。問題になるのは、数学的理念性の創設と伝承の目的論である。(2) デカルト・マルブランシュを読解する際に、彼らによって使用される「自然により設定されたもの(institution de la Nature)」がしばしば言及される。デカルト主義が、「自然」ないしは「神」の審級に委ねた「深淵」を、いわば「世界」へと引き下ろしたのが「制度化」であるとも考えられる。(3) フランス社会学での用法。たとえばマルセル・モースとフォコネは「制度」という言葉を「個人が目の前に見出し、個人に多かれ少なかれ課せられてくる、すでに打ち立てられた行為や観念の総体」と定義し、それはいわゆる政治的・法的な仕組みに限られるのではなく、「慣習や流行、先入観や迷信」なども含んでいると述べている。

«Sociologie» *La grande Encyclopédie*, t. 30)。この社会学的用法はメルロ＝ポンティが参照した、レヴィ＝ストロース、そしてラカンの家族論などにも引き継がれていると思われる。(4) ソシュールはWhitneyのこの語の用法を批判的に継承し、「自然」と「取り決め」の対立の彼方において、言語の「恣意性」を思考したとされる (Claudine Normand, « L'arbitraire du signe comme phénomène de déplacement », in *Dialectiques*, fév, 1974)。(5) 科学史家カンギームは『正常と異常』において、この語をしばしば使用しているが、その場合には生体のみならず「設定 (instituer) する」「規範 (norme)」が問題となる。このような生体にいわばアプリアに備わっている規範や価値の創設のことを彼は「規範化的 (normatif)」と呼ぶ。

¹⁰ 前掲拙稿「野生の世界の風景と出来事の暴力」。

¹¹ この点についてはまたしても拙稿「鏡像のメタモルフォーズと纏う身体の行為論——メルロ＝ポンティ、ラカン、ドゥルーズの絵画論の射程」神尾達之編、『纏う——表層の戯れの彼方に』水声社、2007年、51-91頁の参照をお願いする次第である。

¹² カストリアディスは前掲書において、「想像的なもの」と「象徴的なもの」の共属関係について以下のように述べている。「想像的なものは象徴的なものを、当然のことながら『自己を表現する』ために活用するが、そればかりでなく、『存在する』ため、潜在的なものから、なにかしらそれ以上のものへと移行するためにも、利用しなければならない。(中略)だが反対に、象徴的なものは想像的なものを前提とする。」(*op. cit.*, p. 177)

¹³ 「行為すること (faire)、それは純粋な効率性ではない。このようなものは、観察的な意識の強迫観念であり、目的と意志的決断 (fiat) の足し算を前提している。行為することは、見ることと同じ世界において生起する。私の実質 (所作、発話)こそが、風景の裂け目に、すなわち、なすべきこと (à-faire) へと赴くのだ」(事物の凝固した運動を、ある運動が取り上げ直すようにして)。行為することは、それが他者たちの目の前にあること、みずからもまた象徴的活動であることを知っている。それは目的と選択の定立ではなく、スタイルに従うような作用であり、嫉妬深い意味へと幽閉されてはいないような、事柄 (Sache) への応答であり、そのようにして行為もまた制度化するのである」(IP, 35)。

¹⁴ 「このような漏出を伴う内在性、脱中心化から脱中心化への、全体的な脱中心化なき移行、跨ぎ越しを妨げることのない外在性においてこそ、真に外在性と内在性との融合が、各瞬間にあるのだ。だがヘーゲルはこれらを絶対的なものへと押し進めることによってしか統合しない」(IP, 100)。

¹⁵ 「それでは出来事とは何か。諸存在と諸事物の合成だろうか。外部から襲いかかったとしても (ローズの死)、出来事は外部から来るものではなく、モンテスにおいて全体として予想され、成熟する (『風』、p. 173-174)。それは作られつつあるというよりは、起こらなかったということがありえないような何かである——「いまは予定日に達した緩慢で仮借のない出産の最後の局面」(p. 59-60。Cf. 叫び。『綱渡り』p. 59-60。「あたかも呻いていた女は、叫びが通る道でしかないかのようにだった」「(・・・) 女は、彼女の体を利用している神秘的なものを前に、恐怖で叫んでいる。果たされるべきことを果たすためにそれを乱暴に扱い、引き裂きながら」——生や死のように、準備され、予想され、望まれ——そして予告したものと共通の尺度を持たないものとして恐れられ、なされ、堪えられる。「私はそんなことは考えていなかった」「私はつねにそれを知っていた (夢幻的意識)」(NC, 214)。

¹⁶ 「メルロ＝ポンティとリハビリテーション」という興味深い論考において宮本昌三氏は、ある重度心身障害児の異常な筋緊張を、「肉としての身体が叫んでいる」と記述している (『現代思想』2008年12月臨時増刊、vol. 56-16、一八四頁。「制度化的な苦痛」の概念については、cf. René Kaës, « Souffrance et psychopathologie des liens institués », in *Souffrance et psychopathologie des liens institutionnelles*, Nouvelle présentation, Paris, Dunod, 2005, p. 24-25)。

¹⁷ Gilles Deleuze, *Institution et institution*, Paris, Hachette, 1955. (repris in *L'île déserte et autres textes*, Paris, Minuit, 2002, pp. 24-27; *Empirisme et subjectivité*, Paris, PUF, 1953, 4^e édition)

1988 (cf. par exemple, p. 101).

¹⁸ 多賀茂・三宅康生「ラ・ボルド病院という場所」、多賀茂・三協康生編『医療環境を変える』所収、京都大学学術出版会、二〇〇八年、一四頁。

¹⁹ セクター制度と制度分析の関係については、ティロ・ヘルト「制度分析とセクター制度は両立可能か」、前掲書、四七頁以下を参照。

²⁰ 「ラ・ボルド病院の経験」、前掲書三〇頁。

²¹ 前掲拙稿「野生の世界の風景と出来事の暴力」、二七頁、注 26 を参照。

²² 松嶋健「脱施設化/脱制度化」、前掲書四〇三頁。ドゥルーズ／ガタリにおける「機械」概念が、構造主義の構造概念の乗り越えとして構想され、以後の彼らの共同作業を導いていることについては、拙稿「機械は作動するか——ドゥルーズ／ガタリにおける機械の問題系」、小泉義之・鈴木泉・檜垣立哉編『ドゥルーズ／ガタリの現在』平凡社、二〇〇八年一月、一七六-二〇〇頁の参照を求めることをお許しいただきたい。

²³ バザーリアとフーコー、さらにはガタリやメルロ＝ポンティとの関係については、Mario Coluci et Pierangelo di Vittorio, *Franco Basaglia, Portrait d'un psychiatre intempestif*, Ramonville Saint-Agne, Erès, 2005 が有益である。

²⁴ 慎改康之訳『精神医学の権力』（コレージュ・ド・フランス講義 1973-74）、ミシェル・フーコー講義集成 4、筑摩書房、二〇〇六年、四三二頁。